

熊本県文化財調査報告書 第202集

## 扇ノ坂A遺跡

主要地方道熊本高森線単県幹線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

・

## 堂迫平遺跡

国道266号線特殊改良1種事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

2001.3

熊本県教育委員会



遺跡遠景（横山を向いて）



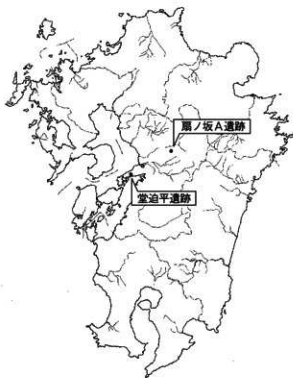
遺跡遠景（熊本平野を見下ろして）

# 扇ノ坂 A 遺跡

主要地方道熊本高森線単県幹線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

# 堂迫平遺跡

国道 266 号線特殊改良 1 種事業に伴う埋蔵文化財発掘調査



2001.3

熊本県教育委員会

## 序 文

熊本県教育委員会では、国道及び県道改良事業に伴う埋蔵文化財調査として、阿蘇郡西原村及び宇土郡三角町に所在する扇ノ坂A遺跡と堂迫平遺跡の発掘調査を実施しました。

今回の調査の結果、扇ノ坂A遺跡では縄文時代早期の集石遺構等が、堂迫平遺跡では、鎌倉時代の地下式土壇が確認されました。

この貴重な文化遺産をここに記録し、後世に伝えていくことが、今後の文化財保護の一助になれば幸いです。また、埋蔵文化財発掘調査にご協力いただいた関係各位をはじめ、地元の方々に心より感謝申し上げます。

平成13年3月31日

熊本県教育長

田 中 力 男

## 例 言

- 1 本書は、県道改良工事に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査である。
- 2 発掘調査は、阿蘇郡西原村大字依山に所在する扇ノ坂 A 遺跡が対象となり、県土木部の依頼を受け熊本県教育委員会が実施した。
- 3 遺物の整理は熊本県教育庁文化課の文化財収蔵庫で行った。
- 4 本遺跡の発掘は平成 11 年度に実施し、整理は平成 12 年度に行った。
- 5 本遺跡は当初、大字名から依山遺跡とした。その後、遺跡地図から扇ノ坂 B 遺跡として調査を進めたが測量の結果、扇ノ坂 A 遺跡であることが判明した。
- 6 本書の第 2 図は、国土地理院 2 万 5 千分の 1 地形図をもとに作成した。また、第 4 図は県土木部から提供を受けたものを利用した。
- 7 現地での実測、写真撮影は坂口、河野、上高原が行った。全体写真は、埋蔵文化財サポートシステムに依頼した。
- 8 本書の執筆および編集は坂口と河野が担当した。
- 9 整理後の保管は文化財収蔵庫で行っている。

## 凡 例

- 1 現地での実測図の縮尺は、地形測量図を 100 分の 1、集石を 20 分の 1、溝状遺構を 20 分の 1、ピット群を 20 分の 1、グリッド図を 20 分の 1 で行った。
- 2 遺構実測図及び遺構配置図、地形測量図の方位は、すべて国土座標における座標北 (G, N) を指す。
- 3 報告書中の出土遺物は通し番号で表記した。

# 本文目次

口絵

序文

例言・凡例

第Ⅰ章	調査の概要	1
第1節	調査に至る経緯と経過	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査組織	1
第2節	遺跡の位置と環境	2
1	地理的環境	2
2	歴史的環境	2
第3節	発掘調査の概要	6
1	調査方法および調査区の設定	6
2	本遺跡における基本層位について	7
第Ⅱ章	扇ノ坂A遺跡の調査	9
第1節	調査の成果	9
1	遺跡の概要	9
2	遺構について	11
(1)	溝状遺構	
(2)	集石	
(3)	ビット群	
3	遺物について	18
(1)	土器	
(2)	石器	
第2節	まとめ	25

写真図版

報告書抄録

## 挿図目次

第 1 図	扇ノ坂A遺跡・堂迫平遺跡	中扉
第 2 図	周辺遺跡分布図	4
第 3 図	基本土層図	7
第 4 図	調査区図	8
第 5 図	調査区土層断面図	9
第 6 図	調査区地形測量図	10
第 7 図	調査区遺構配置図	10
第 8 図	溝状遺構図	11
第 9 図	1号集石遺構図	12
第 10 図	2号集石遺構図	12
第 11 図	3号集石遺構図	13
第 12 図	4号集石遺構図	13
第 13 図	5号集石遺構図	14
第 14 図	6号集石遺構図	14
第 15 図	7号集石遺構図	15
第 16 図	8号集石遺構図	15
第 17 図	北側ピット群平面図	16
第 18 図	南側ピット群平面図	17
第 19 図	西側ピット群平面図	17
第 20 図	遺物実測図 (土器)	19
第 21 図	遺物分布図 (土器)	20
第 22 図	遺物実測図 (石器①)	21
第 23 図	遺物実測図 (石器②)	22
第 24 図	遺物実測図 (石器③)	23
第 25 図	遺物分布図 (石器)	24

## 表目次

第1表	周辺道跡地名表	4
第2表	調査工程表	6
第3表	遺物観察表	23
第4表	石器計測表	23

## 写真図版

口絵	道跡遠景（依山を向いて）・道跡遠景（熊本平野を見下ろして）	
図版1	調査区	29
図版2	溝状遺構	30
図版3	集石	31
図版4	集石	32
図版5	ピット群	33
図版6	出土遺物（土器）	34
図版7	出土遺物（石器）	35



# 第1章 調査の概要

## 第1節 調査に至る経緯と経過

### 1 調査に至る経緯

平成10年4月8日付で熊本土木事務所より熊本県教育委員会文化課あてに、主要地方道熊本高森線単線幹線道路整備事業の予定区間における埋蔵文化財の確認調査の依頼がなされた。それを受けて、同年8月に遺跡台帳と現地踏査を実施した。その結果、試掘・確認調査の必要があるとの回答を行った。

この分布調査の結果をもとに、熊本土木事務所との協議を行い、用地交渉が終了した地点から順に試掘・確認調査を実施することとし、平成10年8月1・7・8・9日にかけて10ヶ所の確認地点を設定し、実施した。この試掘・確認調査の結果、第10地点において遺物の包含層が確認され、対象面積697㎡においては発掘調査が必要であり、その他の地点については、その必要性はないことと通知した。

これらの結果にもとづき第10地点（扇ノ坂A遺跡）について平成10年5月10日から発掘調査を実施し、6月22日に終了した。

### 2 調査組織

調査主体 熊本県教育委員会

#### 【発掘調査（平成11年度）】

##### 調査責任者

豊田 貞二（主席教育審議員・文化課長）

川上 康治（課長補佐）

##### 調査総括

島津 義昭（課長補佐）

江本 直（主幹・文化財調査第2係長）

##### 調査担当

坂口圭太郎（文化財保護主事）

河野真理子（文化財保護主事）

上高原 聡（嘱託）

##### 調査事務

小斉 久代（総務係長）

廣瀬 泰之（参事）

川口 久夫（主事）

##### 調査協力者

西原村教育委員会

#### 【報告書作成（平成12年度）】

##### 総括

阪井 大文（文化課長）

島津 義昭（課長補佐）

江本 直（主幹・文化財調査第2係長）

##### 整理担当者

坂口圭太郎（文化財保護主事）

河野真理子（文化財保護主事）

宮崎まい子（嘱託）

##### 調査事務

中村 幸宏（主幹・総務係長）

廣瀬 泰之（参事）

杉村 輝彦（主事）

## 第2節 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

扇ノ坂A遺跡の所在する、西原村は、阿蘇外輪山西麓の依山（標高1095m）・冠ヶ岳（標高1154m）の麓に位置し、村内を布田川、木山川、鳥子川等が流れ、標高200mから400mほどの台地が熊本平野に向かって西側に広がっている。

このように北は、白川を境に大津平野と接し、南は高畑山（標高796m）、長山（標高658m）を境にして吉無田高原と接する。東は依山、冠ヶ岳などの阿蘇外輪山を境に阿蘇南郷谷と接し、西へ向かうと高遊原台地となり、平坦な原野が続いている。

西原村は大峯（標高409m）を境に木山川流域と鳥子川流域との2つの地域に分かれる。

木山川流域は、冠ヶ岳、高畑山から連なる、なだらかな原野が広がり、木山川の支流によって多くの小平坦地が形成されている。

一方、鳥子川流域では依山西麓の急斜面が西に広がるにつれて、緩やかに小谷と小平坦地を形成しながら葛目川と袴野川の2支流が合わさって鳥子川になり、さらに北西方向に流れ大津町で白川と合流している。

このような複雑な地形は、多くの湧水点を生み出すに至っている。

### 2 歴史的環境

#### 先土器時代

西原村の先土器時代は、14ヶ所で確認されている。ナイフ型石器文化8遺跡、細石器文化12遺跡である。しかしその多くは、本格的な調査によるものではなく、表面採集によって確認されたものであり、遺跡の具体像は明らかではなかった。

遺跡の分布は、鳥子川上流域の桑鶴・小森遺跡群と高畑山西麓に分布する西原公共成牧場周辺遺跡群に分けられる（江本1985）。

桑鶴・小森遺跡群は標高300～400mの広大な山裾部に広がりを見せている。1961年、乙益重隆氏、吉崎昌一氏により調査が行われ、その後熊本大学考古学研究室により2度にわたり調査が行われ、細石

刃が発見されている（熊本大学考古学研究室1979）。

また、近年県道熊本高森線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査において、古池さん遺跡からナイフ型石器、台形椀石器、三稜尖頭器、細石刃が検出され、古池さん北遺跡では、台形椀石器、三稜尖頭器が検出されている。

今回の調査では、縄文前期の包含層からの出土ではあるが、ナイフ型石器が1点出土している。

西原公共成牧場周辺遺跡群は、標高500～700mの舌状に張り出した丘陵上に点在している。採集資料が多く遺跡の実態が明らかでなかったこの遺跡群において1996年以来行われている熊本大学文学部考古学研究室による西原D遺跡（注1）の調査はその先土器文化の実態を解明する多くの資料を提供している。

#### 縄文時代

西原村で縄文時代の遺跡は35ヶ所に及ぶ。しかしその多くは、表面採集資料によるものであり、その具体的な内容は明らかでない点が多い。

早期の遺跡は、桑鶴土橋遺跡、木屋敷遺跡、丸林遺跡、葛目遺跡、古池さん遺跡、古池さん北遺跡、塩井社遺跡、扇ノ坂A遺跡等がある。

前期の遺跡は桑鶴土橋遺跡、お池さん遺跡、木屋敷遺跡、古池さん遺跡、塩井社遺跡、扇ノ坂A遺跡等がある。

中期の遺跡は、木屋敷遺跡、古池さん遺跡、中桑鶴遺跡からは、瀬戸内系の船元式土器が出土している。

後期の遺跡は、木屋敷遺跡、丸林遺跡、古池さん北遺跡、桑鶴土橋遺跡等がある。

晩期の遺跡は、桑鶴土橋遺跡、打砕遺跡がある。

#### 弥生時代

塩井社遺跡、大切畑遺跡、秋田原遺跡、木屋敷遺跡、桃ノ木原遺跡、秋田上ノ原遺跡、田遊遺跡、打砕遺跡がある。

谷頭遺跡では13軒の竪穴式住居が検出され、西原村における当時代の様相を明らかにする資料として注目される。

## 参考文献

- 松村道博編  
『谷頭遺跡』谷頭遺跡調査団 1978  
熊本大学考古学研究室  
『桑鶴土橋遺跡』研究活動報告 5 1979  
熊本大学考古学研究室  
『塩井社遺跡』研究活動報告 8 1980  
肥後考古学会  
『肥後考古』第 5 号 1985  
緒方 勉 瀬田裏遺跡調査団  
『瀬田裏遺跡調査報告』Ⅱ 1992  
熊本県文化財調査報告書第 162 集  
『打砕遺跡』  
『古池さん遺跡』  
『古池さん北遺跡』 1997  
熊本大学考古学研究室  
『西原 F 遺跡 3』研究活動報告 1998  
熊本大学考古学研究室  
『西原 F 遺跡 4』研究活動報告 2000

注 1) 熊本県教育委員会編『熊本県遺跡地図』で、本遺跡は河原第 14 遺跡となっている。



第2図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	一尾洲2地点	矢通川 一尾洲	古墳	古墳後期
2	ナギナタ	早川(通称ナギナタ)	縄文	斎庭文、御膳式、野辺田式
3	水の山	矢通川 水ノ山	縄文	神聖文、御膳式、黒髪式、野辺田式、支石墓
4	早川原遺	早川 水溝	弥生・古代	
5	陸奥城跡	早川	中世	
6	岩屋敷	真木	弥生	野辺田式土器出土
7	八蓮	大津 八蓮	縄文~中世	
8	西勢塚免	大津 西勢塚免	弥生~古墳	
9	五里木跡	大津	古墳	
10	西原	大津 西原	古墳	野辺田式土器包含、倉付墓出土
11	大松山	大津(通称大松山)	弥生	弥生2期出土
12	津波横穴群	大津 津波	古墳	コノ字型床、黒床を備えるあり
13	大津	大津 大津	縄文	大石橋、石輪、土師片少数
14	中井手	中井手	古代	
15	三田城跡	陣内 三田	中世	(寄宮城跡)
16	上陣内	陣内 上陣内	弥生~古代	
17	下陣内	陣内	古墳	土師器散布
18	引水	引水	弥生	コベスの高100m、弥生末期
19	田尾	陣内(通称田尾)	古代・中世	
20	岩屋横穴	岩坂(通称油出)	古墳	須家器
21	西念寺跡	岩坂	中世	菅町期、大型五輪埴片
22	岩坂	岩坂	縄文	神聖文土器
23	宝斎橋	中島 宝斎橋	弥生	弥生末遺文、弥生
24	岩坂カンカン塚	岩坂	中世	春日原状文、弥生
25	岩坂横塚	岩坂	中世	
26	吹田A	吹田	縄文	土器片、石磨など
27	吹田B	吹田	縄文	土器片、石磨など
28	吹田C	吹田	縄文	土器片、石磨など
29	森	森 種彦	縄文	御膳式
30	城の本城跡	吹田 上池橋	中世	
31	池上城跡	吹田 上池橋	中世	中世城跡
32	鳥子川	鏡野 鳥子川	弥生・古墳	後期土器

33	鏡野	外牧	大鏡	縄文～古墳	原調査
34	真木古墳	真木	真木	古墳	円墳
35	今城跡(真木城)	真木	東津原	中世	合志一集
36	真木	真木	西香取原	縄文	調査2本出土
37	古塚村城跡	古塚	西香取原	中世	合志一集城跡
38	合志一集墓	真木	真木	中世	
39	中後泊	古塚	中後泊	縄文	神聖文・墓の神式
40	日向	矢須川	日向	弥生	弥生中期、後期土器片
41	豆野塚城跡	平川	檜城平	中世	
42	高尾野	高尾野	高尾野	古墳	野辺田式土器遺存
43	六里木跡	大津	大津	近世	
44	清玉古墳	高尾野	高尾野	古墳	
45	潮田裏G	潮田	潮田	縄文・古代	土器片、石鏝など
46	潮田裏F	潮田	潮田	縄文・古代	土器
47	潮田裏D	潮田	潮田	縄文	土器片、石鏝など
48	潮田裏C	潮田	潮田	縄文	土器片、石鏝など
49	吹田E	吹田	吹田	縄文	土器片、石鏝など
50	吹田D	吹田	吹田	縄文	土器片、石鏝など
51	潮田裏A	潮田	潮田	縄文	土器片、石鏝など
52	潮田裏B	潮田	潮田	縄文	土器片、石鏝など
53	潮田内宮尾	潮田	潮田	古墳・縄文・弥生	寺跡、(屋敷跡)
54	潮田裏	潮田	長袖ほか	縄文・古墳	
55	潮田裏古墳群	潮田	潮田裏	古墳	3～4基(石甕のみ)封土なし
56	潮田裏E地点	潮田	潮田裏	縄文	
57	大鏡A	外牧	大鏡	縄文	原調査
58	大鏡B	外牧	大鏡	縄文	原調査
59	前塚	外牧	前塚	縄文	内牧遺跡A
60	内牧B	外牧	外牧	縄文	
61	外牧	外牧	外牧	縄文・弥生	
62	潮田裏K	潮田	潮田	縄文	土器
63	潮田裏J	潮田	潮田	縄文	土器片
64	潮田裏I	潮田	潮田	縄文	土器片
65	潮田裏H	潮田	潮田	縄文	土器
66	外牧代官所跡	外牧	外牧	中世	(笠戸城)
67	鹿野津遺跡	外牧	外牧	近世	石畳道、橋幅2m、長さ25m
68	上井出入口	外牧	大鏡	近世	
69	栗山跡	外牧	栗山	中世	
70	岩戸神社遺かけ	外牧	畑崎	縄文	岩屋遺跡
71	九万石城跡	矢須川	中在田	中世	
72	小龜	鳥子	持失倉	縄文～古代	石鏝、須原器
73	菅元	鳥子	菅元	縄文	縄文晩期土器、石鏝
74	風通	鳥子	風通	古墳	清原墓
75	穂の平	鳥子	穂の平	縄文・弥生	縄文後晩期土器、弥生土器、土師器
76	堤の木原	鳥子	堤の木原	縄文	縄文早期土器、土師器
77	がくが峰	鳥子	鳥越	弥生	弥生後期土器
78	さつね塚古墳群	小龜	風通	古墳	円墳、蓋刀出土
79	風通	小龜	風通	弥生	弥生後期土器、石釘
80	古岡	鳥子	古岡	縄文	縄文早期土器、土師器
81	裏目	鳥子	上裏目	縄文・弥生	縄文早期、弥生後期土器、土師器
82	裏目横穴	鳥子	裏目谷	古墳	
83	下六段田横穴	鳥子	下六段田	古墳	
84	風の元の宝器出土地	鳥子	菅元	近世	鉄器12点、肥前陶
85	鳥子城跡	鳥子	陣ノ上	中世	中世城跡
86	古岡内	鳥子	古岡内	縄文	
87	身ノ陣の上	鳥子	陣ノ上	縄文	
88	下六段田の磨崖仏	鳥子	下六段田	中世	
89	上鳥子横穴群	鳥子	水の谷	古墳	
90	さつね塚石棺群	小龜	風通	古墳	
91	桑鏡古屋敷	小龜	桑鏡	縄文～古墳	縄文・弥生、古墳期土器出土
92	桑鏡川の坂の坂(桑鏡古池さん)	小龜	桑鏡	縄文・弥生	縄文・弥生
93	桑鏡	小龜	桑鏡	弥生	弥生土器、土師器、須原器
94	日里為	鳥子	日里為	縄文～古代	
95	桑鏡土橋	小龜	桑鏡土橋	縄文・弥生	縄文・弥生土器、土師器
96	丸井	小龜	桑鏡	縄文～古代	
97	鳥子城	鳥子	上鳥子	中世	中世城跡
98	徳が	小龜	徳が	縄文～弥生	縄文早期、弥生後期、土師器
99	中在田の上	小龜	大切畑	弥生	弥生後期土器、土師器、須原器
100	うづまい	小龜	土橋	弥生	弥生後期土器
101	陣野	小龜	陣ノ家	縄文・弥生	縄文前期、弥生土器
102	堤が池	小龜	桑鏡	弥生	弥生後期土器、土師器、須原器
103	堤が池西側台地	小龜	桑鏡	縄文・弥生	縄文後晩期、弥生後晩期土器
104	先ノ原	小龜	大切畑	縄文～中世	
105	風通	小龜	風通	縄文～中世	
106	新所重上原	小龜	陣ノ上	縄文～中世	
107	清み原	小龜	陣ノ上	縄文～中世	
108	風ノ坂A	桑鏡	鳥子	旧石器～縄文	土器片、土器、石鏝、石斧
109	雨舟水	赤水	赤水	弥生～中世	
110	二重峠の石倉遺	車塚	坂ノ下	近世	車塚遺跡、参勤交代石倉
111	二重峠	車塚	坂ノ下	旧石器	
112	上柳田	無田	渡瀬	縄文・弥生	石鏝・石斧
113	車塚	車塚	村下	縄文～中世	
114	二重峠A	車塚	二重峠	旧石器	
115	二重峠B	車塚	二重峠	縄文	切り出し、繋ぎイデ、石鏝、土器片
116	井川下	車塚	車塚	縄文	一部土師器
117	堀出口	車塚	坂ノ下	旧石器	旧石器
118	坂ノ下田	車塚	坂ノ下	縄文	土師器(8c～9c)
119	清宗	車塚	車塚	古代	土師器、須原器
120	風ノ坂B	河原	河原	旧石器～縄文	
121	風ノ坂C	河原	河原	旧石器～縄文	
122	風ノ坂D	河原	河原	旧石器～縄文	
123	橋木	河原	橋木	縄文	

### 第3節 発掘調査の概要

#### 1 調査方法および調査区の設定

当該地点での主要地方道熊本高森線単軌幹線道路整備事業は、熊本市内より阿蘇南郷谷へ抜ける県道の新規取り付け道路建設である。この工事により、扇ノ坂A遺跡の東端がかかる。このため、約697㎡の発掘調査を実施した。

調査区の手順と方法は以下のとおりである。

まず、地表から約20cmをバックホーで除去し、その後、人力により掘り下げを行った。

Ⅱ層除去後、国土座標に従い、5m×5mのグリッドを設定した。

調査は、遺構と遺物の検出を中心に実施した。

遺構は、平面でのプラン確認後、土層観察のための土手を残し、掘り下げを行った。遺構埋土除去後、

土層図を実測し、堆積状況の記録写真撮影後土手を除去した。完掘後、記録写真を撮り、20分の1の縮尺による平面及び断面図を作成する。今回は、須恵器を検出した溝状遺構の下層に縄文早期の遺物を含む包含層が確認されているため、更に下層へ向かって掘り下げを行った。

縄文早期の遺物包含層は、V層（アカホヤ2次堆積層）及びⅦ・Ⅹ・Ⅹ層に見られる。V層の遺物は遺跡が東側から緩やかに西側にかけて傾斜しているため、上層からの流入による物と考えられる。

Ⅹ層より、集石及びビット群が検出できた。この層から下が、本遺跡における縄文時代早期の生活層と考えられる。この事からⅩ・Ⅹ層における縄文時代早期の遺物は現位置を保っていると考えられる。

検出した遺物は、グリッド別、基本土層別別、種類別に、遺物番号を付け、高さを記録し取り上げを行った。

第2表 調査工程表

月	5	6
調査内容	表土除去作業 (5/10) 清掃作業 メッシュ杭設置 (5/21) 旧地形の検出・測量 溝状遺構調査 縄文包含層掘り下げ 集石遺構調査	航空写真撮影 (6/16) 全体測量
備考	プレハブ設置 (5/10)	プレハブ撤収 (6/18) 機材搬出 (6/22)

## 2 本遺跡における基本層位について

扇ノ坂A遺跡では、阿蘇外輪山から延びる丘陵上の先端にあたるため、調査区内はほとんど平坦面がない。今回の調査で、Ⅷ層（黒褐色粘質土）を基本に11層に分類できた。

以下に層位ごとに説明を行う。

### 第Ⅰ層（黒色土）

黒灰色の火山灰を多量に含む。砂質でしまりがいい。遺物等は一切含まない。

### 第Ⅱ層（黒色土）

黒灰色の火山灰を多量に含む。やや砂質でしまりがいい。遺物等は一切含まない。

### 第Ⅲ層（黒褐色土層）

黒灰色の火山灰を少量含む。ごく弱い粘質でしまりがいい。旧耕作土で、若干の遺物を含む。

### 第Ⅳ層（黄褐色土層）

やや粘質で、ややしまりがある。若干の遺物を含む。溝状遺構はこの層の下部で検出した。

### 第Ⅴ層（黄褐色土層）

アカホヤの2次堆積である。やや粘質で、ややしまりがいい。遺物を含まない。

### 第Ⅵ層（褐色土層）

やや粘質で、しまりがある。遺物を含まない。

### 第Ⅶ層（褐色土層）

やや粘質で、Ⅴ層と比べややしまりが強い。遺物を含まない。

### 第Ⅷ層（褐色土層）

やや粘質で、Ⅵ層と比べてしまりが強い。縄文時代早期の遺物を若干含む。

### 第Ⅸ層（黒褐色土層）

粘質でしまりがある。縄文時代早期の遺物の包含層である。

この層から集石とビット群を検出した。

### 第Ⅹ層（暗褐色土層）

やや粘質でしまりがある。縄文時代早期の遺物の包含層である。

### 第Ⅺ層（黄褐色土層）

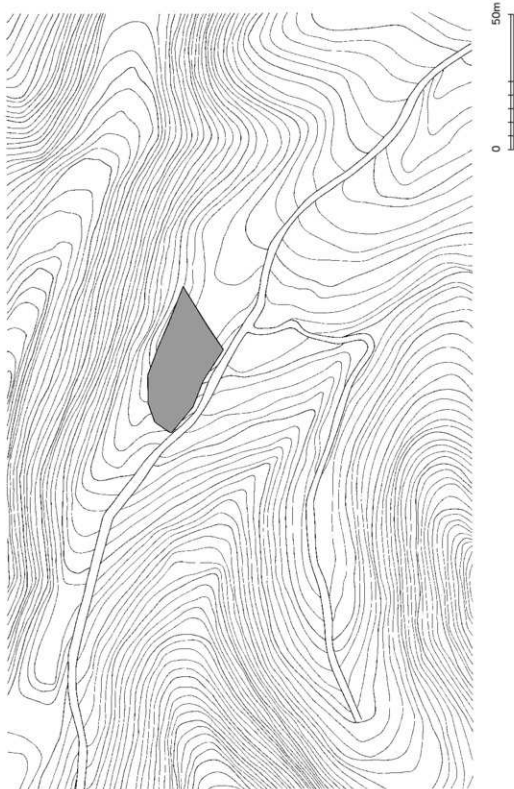
ソフトロームに相当する土層である。やや粘質で、ややしまりがある。遺物等は一切含まない。

### 第Ⅻ層（黄褐色土層）

ハードロームに相当する土層である。やや粘質で、Ⅹ層よりしまりがある。遺物等は一切含まない。

I 黒色土（表土）
II 黒色土
III 黒褐色土
IV 黄褐色土
V 黄褐色土 （アカホヤ2次堆積を含む）
VI 褐色土
VII 褐色土
VIII 褐色土
IX 黒褐色土
X 暗褐色土
XI 黄褐色土 （ソフトローム）
XII 黄褐色土 （ハードローム）

第3図 基本土層図



第4図 調査区図



## 第Ⅱ章 扇ノ坂A遺跡の調査

### 第1節 調査の成果

#### 1 遺跡の概要

今回の調査対象範囲の697㎡の中において時期不明の溝状遺構1基と縄文早期の集石8基及びピット群を検出した。

その分布は、溝状遺構が調査範囲のほぼ中央部、丘陵上の先端部にあたる最も高いこの地点に存在する。この遺構はⅢ層で検出した。周辺から、土師器片が検出され、また溝状遺構の底から須恵器片が確認されたことから、少なくとも、古代以前に作られたものと考えられる。

集石は、調査区の東側に集中して分布する。いずれも、丘陵上のわずかな平坦面ではなく、斜面に作られている。8基中、4基に掘り込みが確認された。

集石は、ほぼすべての石に赤変と割れが認められ、この事実は加熱された痕跡であると考えられる。これらの遺構は、Ⅰ層で検出した。この層からは、縄文早期の押形文土器と石楾、磨石、石皿等が検出されており、このことから、集石遺構は、縄文早期に作られたと考えられる。

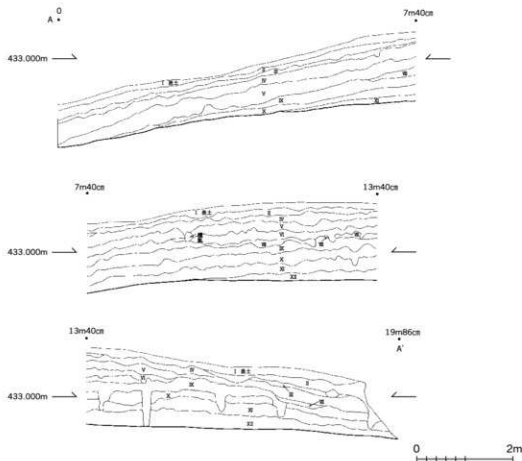
ピット群は、丘陵上の斜面に沿っていくつかのブロックに分かれて存在する。

直径が10cm程度の小型ピットがほとんどで、整然とした配列は確認できなかった。

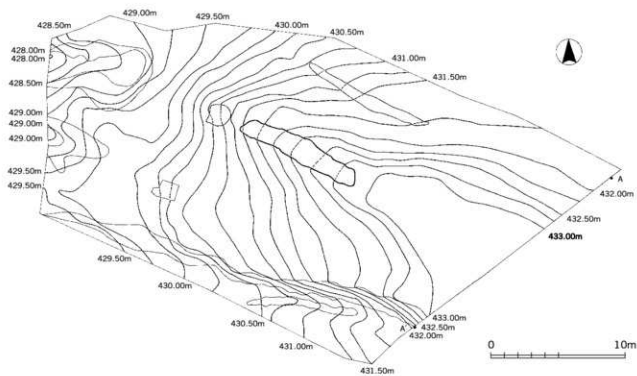
深さは、1mを越える深さであるものが多く、底は先尖りの形状と平底の形状のものに分かれる。

ただし、その形態の違いで、分布の違いは確認されなかった。このピット群の柱穴からは、遺物は検出されなかった。

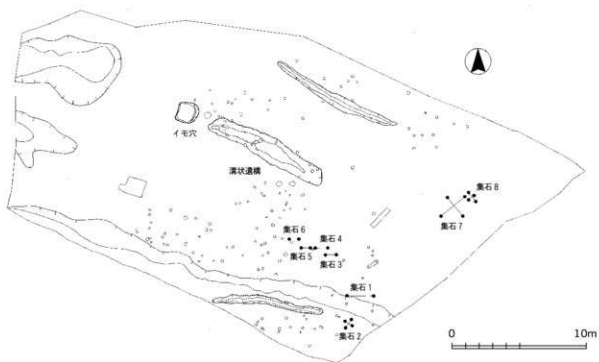
出土遺物がないため、正確な時期は不明であるが、集石とおなじⅠ層から掘り込みが確認されたことから、縄文早期に作られたと考えられる。



第5図 調査区土層断面図



第 6 図 調査区地形測量図



第 7 図 調査区遺構配置図

## 2 遺構について

### (1) 溝状遺構

溝状遺構は、調査区のほぼ中央で検出された。

丘陵上のほぼ頂上部に作られている。長軸約9.8m、短軸約1.8m、深さ約20cmを測る。平面形は不整形である。埋土は4層に分けられる。

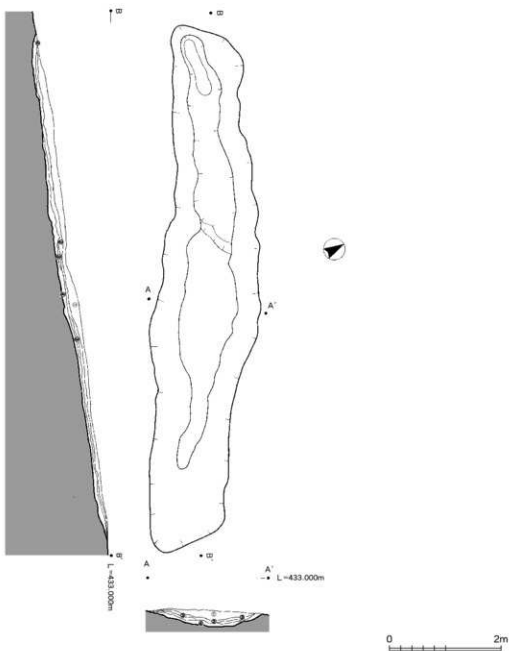
①層は、暗褐色土でやや粘質、しまりがなく、遺物等は一切含まない。

②層は黒褐色でやや粘質、1層に比べややしまりがある。遺物等は一切含まない。

③層は暗褐色でやや砂質、1層に比べしまりがない。遺物等は一切含まない。

④層は黄褐色土でやや粘質、埋土中最もしまりがある。この層から、須恵器が1点出土している。

この溝の作られた時期については、不明であるが、埋土中から検出された須恵器と溝周辺で検出された土師器から、古代以前に作られたと考えられる。



第8図 溝状遺構図

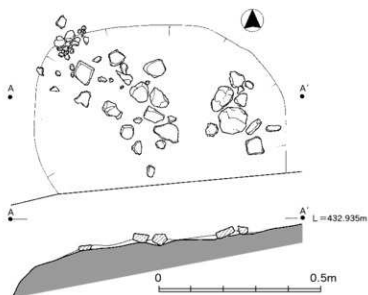
## (2) 集石

### 1号集石

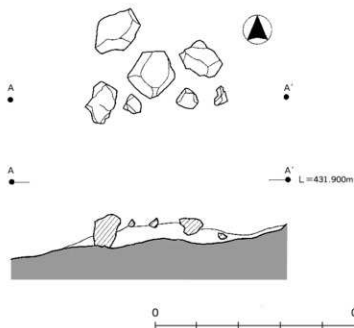
1号集石は、調査区の南東に位置している。遺構は2～10cm程の礫が長軸約1.5m、短軸約0.9mの範囲に集中して検出された。これらの礫の多くに熱を受けて赤化しているものが認められた。この遺構から石皿が出土している。

また、これらの礫を取り除いた跡に浅い土壌が検出された。

この遺構は長軸約1.4m、短軸約0.8mの不整形の平面プランで南側が後世の削平によって失われていた。土壌内において加熱された痕跡は認められなかった。



第9図 1号集石遺構図



第10図 2号集石遺構図

### 2号集石

2号集石は、調査区の南東に位置している。遺構は5～12cm程の礫が長軸約0.4m、短軸約0.3mの範囲に集中して検出された。これらの礫の一部に熱を受けて赤化しているものが確認された。

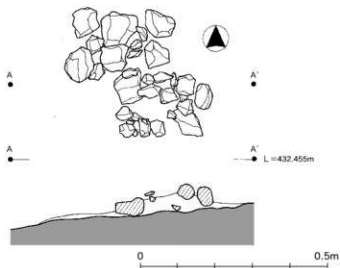
これらの礫を取り除いた跡に土壌は検出されなかった。

### 3号集石

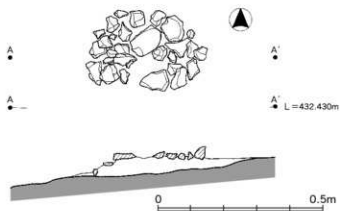
3号集石は、調査区の中央やや南東よりに位置している。遺構は2～10cm程の礫が長軸約0.9m、短軸約0.7mの範囲に集中して検出された。

これらの礫の多くに熱を受けて赤化しているものが認められた。

これらの礫を取り除いた跡に土壌は検出されなかった。



第11図 3号集石遺構図



第12図 4号集石遺構図

### 4号集石

4号集石は、調査区中央のやや南東よりに位置している。遺構は3～10cm程の礫が長軸約0.8m、短軸約0.6mの範囲に集中して検出された。

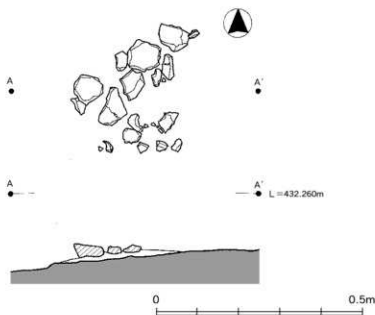
これらの礫の多くに熱を受けて赤化しているものが認められた。

これらの礫を取り除いた跡に土壌は検出されなかった。

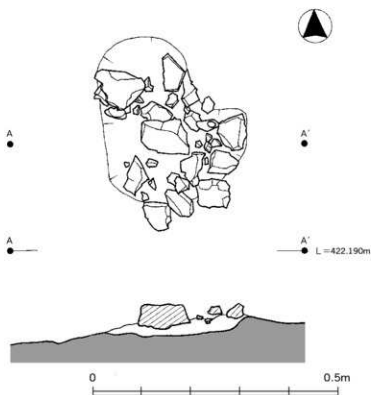
### 5号集石

5号集石は、調査区の中央やや南東よりに位置している。遺構は3～10cm程の礫が長軸約0.5m、短軸約0.4mの範囲に集中して検出された。これらの礫の多くに熱を受けて赤化しているものが認められた。

これらの礫を取り除いた跡に土壌は検出されなかった。



第13図 5号集石遺構図



第14図 6号集石遺構図

### 6号集石

6号集石は、調査区の南東に位置している。遺構は2～10cm程の礫が長軸約0.5m、短軸約0.4mの範囲に集中して検出された。これらの礫の多くに熱を受けて赤化しているものが認められた。

また、これらの礫を取り除いた跡に浅い土壌が検出された。

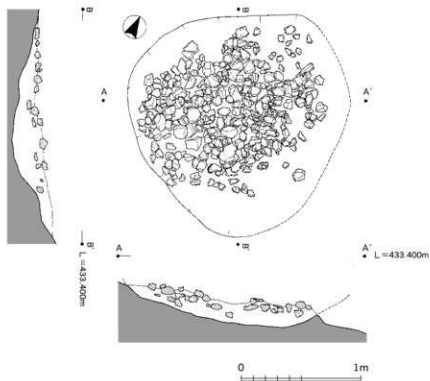
この遺構は長軸約0.5m、短軸約0.4mの不整形の平面プランをもつ。土壌内において加熱された痕跡は認められなかった。

### 7号集石

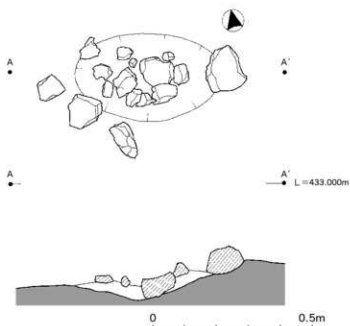
7号集石は、調査区の北東に位置している。遺構は4～17cm程の礫が長軸約1.8m、短軸約1.6mの範囲に集中して検出された。本遺跡の中で最も多くまとまって集石が確認されている。これらの礫の多くに熱を受けて赤化しているものが認められた。

これらの礫を取り除いた跡に土壌が検出された。長軸約2.1m、短軸約2.0mの不整形の平面プランをもち、底はすり鉢状を呈す。

土壌内において加熱された痕跡は認められなかった。



第15図 7号集石遺構図



第16図 8号集石遺構図

### 8号集石

8号集石は、調査区の北東に位置している。遺構は3～14cm程の礫が長軸約0.6m、短軸約0.4mの範囲に集中して検出された。これらの礫の多くに熱を受けて赤化しているものが認められた。

これらの礫を取り除いた跡に土壌が検出された。長軸約0.6m、短軸約0.4mの不整形のプランをもち、底はすり鉢状を呈す。

土壌内において加熱された痕跡は認められなかった。

### (3) ビット群

#### 北側ビット群

調査区の北側斜面に作られていた。Ⅶ層から掘り込まれており、群としてのまとまりは認められるが、規則的配列された痕跡は確認できなかった。

ビットはほぼ垂直に掘り込まれており、深さはいずれも1mを越える。

ビット中の埋土は黒褐色でしまりが無い。遺物は検出されなかった。

#### 南側ビット群

調査区の南側斜面に作られていた。Ⅶ層から掘り込まれており、群としてのまとまりは認められる。最も南側でほぼ1列に並んでいるが、これをもって櫛状の構造物であるとは確認できなかった。

この他に規則的配列された痕跡は確認できなかった。ビットは、北側ビット群同様、ほぼ垂直に掘り込まれており、深さはいずれも1mを越える。

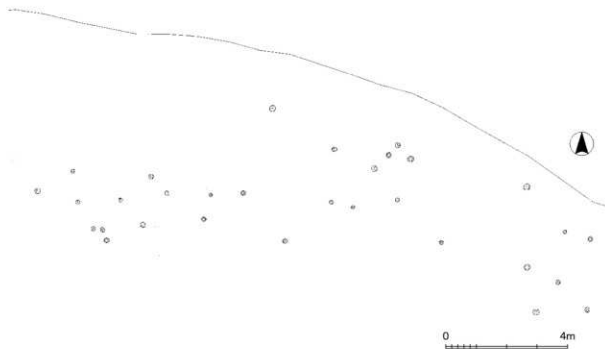
ビット中の埋土は黒褐色でしまりが無い。遺物は検出されなかった。

#### 西側ビット群

調査区の西側斜面に作られていた。Ⅶ層から掘り込まれており、最も群としてのまとまりが大きい。

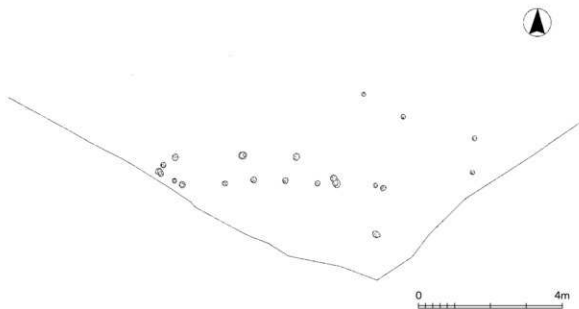
規則的配列された痕跡は確認できなかったが、群の中央が大きく開いているため、何らかの構造物を支える柱であった可能性は考えられる。このビット群もほぼ垂直に掘り込まれており、深さはいずれも1mを越える。

ビット中の埋土は黒褐色でしまりが無い。遺物は検出されなかった。

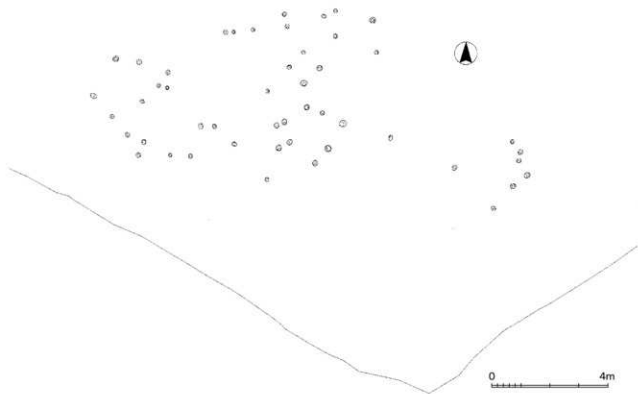


第17図 北側ビット群平面図





第18図 南側ピット群平面図



第19図 西側ピット群平面図

### 3 遺物について

#### (1) 土器

扇ノ坂A遺跡では全部で20点の土器が検出された。出土層別では、第Ⅱ層、第Ⅲ層から、土師器、須恵器、縄文土器が出土した。

これらのうち、第Ⅲ層から出土した須恵器は前述の溝状遺構からの出土である。第Ⅶ層と第Ⅷ層と第Ⅸ層からは縄文早期の押形文土器が出土した。

集石やピット群はこのうち、第Ⅷ層に属し、このことから、縄文早期の押形文土器の生活層はこの第Ⅷ層であると考えられる。

押形文土器は、いくつかの文様に分けられる。外面の調整では楕円文が8点、格子文が2点、山形文が9点に分類できる。

1は須恵器で高杯の脚である。2は口縁である。補修孔が空けられている。外器面は横方向の楕円文で、内器面は口縁内側に原体条痕を持ち、横方向に楕円文が施されている。3は胴部である。外器面は縦方向に楕円文が施されている。4は底部である。外器面は底近くまで、楕円文が横方向に施されている。形状から、平底であると考えられる。5は、胴部で外器面は楕円文が横方向に施されている。6は胴部の下半分で外器面は縦方向に山形文が施されている。7は口縁部に近い胴部で、外器面は山形文が縦方向に施されている。内器面は横方向に山形文が施されている。8は胴部で外器面は縦方向に楕円文が施されている。9は口縁で横方向に格子文が施されている。内器面は口縁内側に原体条痕を持ち、横方向に格子文が施されている。

10は口縁で外器面は縦方向に楕円文が施されている。内器面は原体条痕をもつ。11は胴部で外器面は横方向に楕円文が施されている。12は胴部で外器面は横方向に山形文が施されている。13は胴部の底部近くで外器面は縦方向に山形文が施されている。14は口縁で外器面は山形文の横方向への施文である。内器面は口縁内側に原体条痕をもち、横方向に山形文が施されている。15は胴部で外器面は縦方向の山形文が施されている。

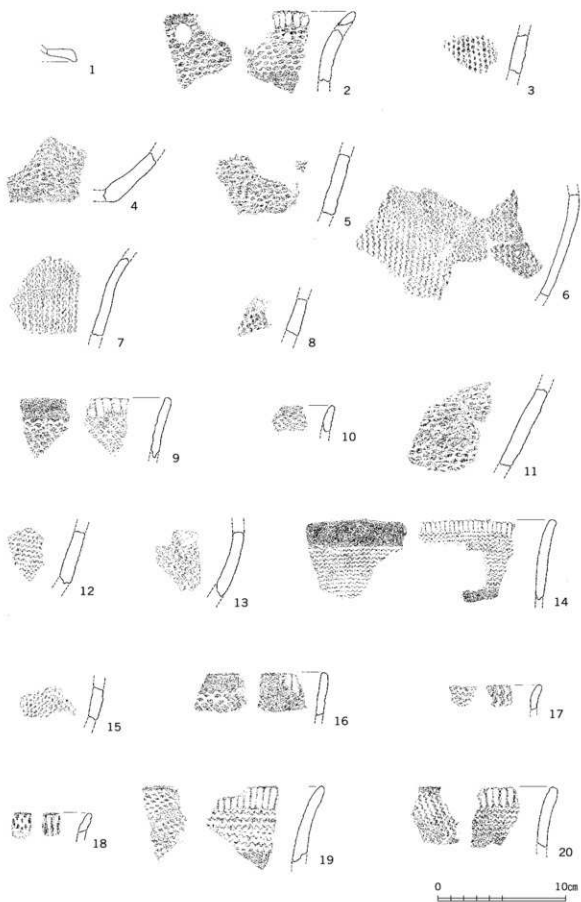
16は口縁で外器面は楕円文の横方向への施文である。内器面は口縁内側に原体条痕をもち、横方向に楕円文が施されている。17は口縁で外器面は横方向に山形文が施されている。内器面は口縁内側に原体条痕をもち、横方向に山形文が施されている。18は口縁で外器面は縦方向に楕円文が施されている。内器面は口縁内側に原体条痕をもつ。19は口縁で外器面は横方向に楕円文が施されている。内器面は口縁内側に原体条痕をもち、横方向に山形文が施されている。20は口縁で外器面は縦方向に山形文が施されている。内器面は口縁内側に原体条痕をもち、横方向に山形文が施されている。

#### (2) 石器

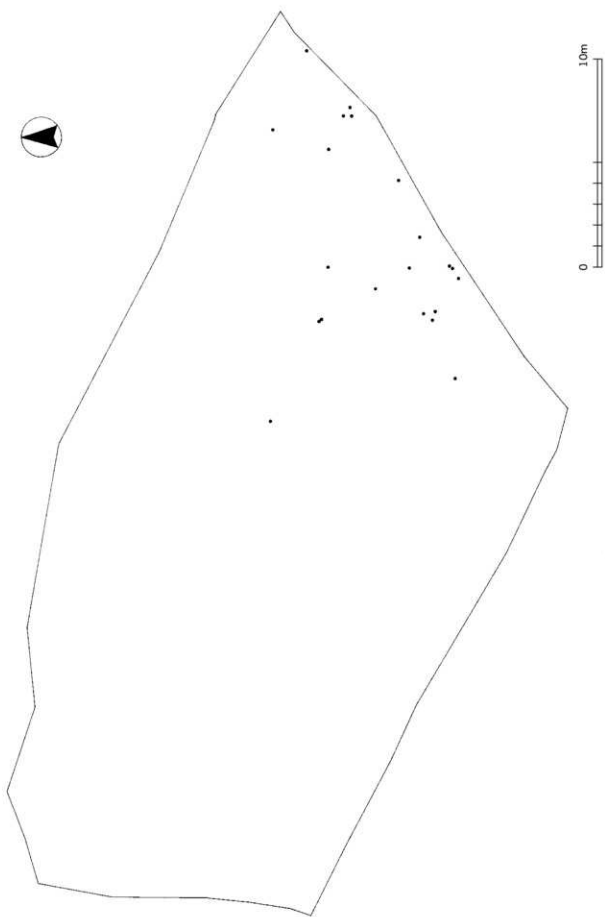
扇ノ坂A遺跡では全部で11点の石器が検出された。其のすべてがⅧ層より出土した。其の内訳は、ナイフ形石器1点、石鎌4点、異形石器1点、二次使用痕のある剥片1点、磨石1点、石皿2点である。

1はナイフ形石器である。Ⅷ層からの出土ではあるが、その形態から縄文早期に使用されていたものとは考えにくく、縄文早期の包含層に混入した物と考えられる。2は抉りの浅い石鎌である。3は、やや抉りが深い石鎌である。4は3と同じ形態の石鎌である。5はやや未加工の部分を残す石鎌である。

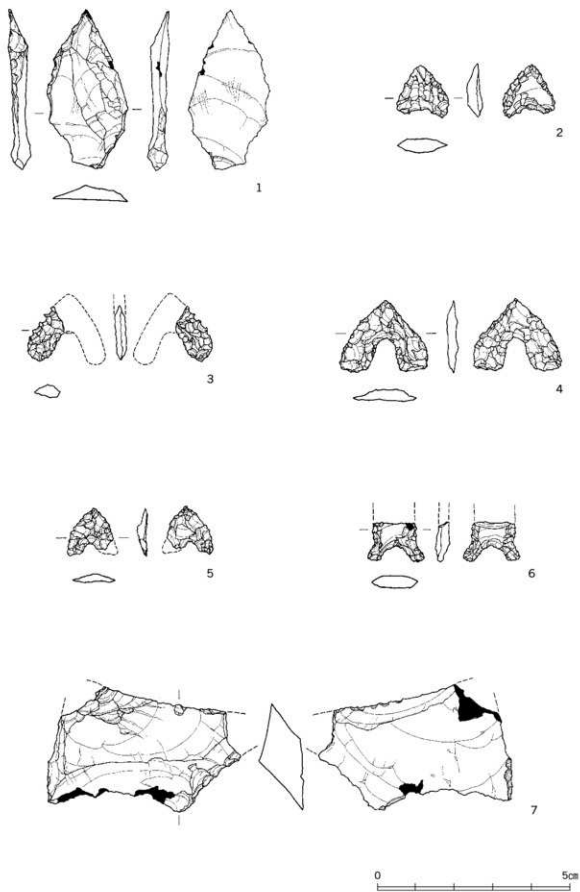
6は異形石器である。通称「トロトロ石器」に形態が似ている。上部のほとんどを欠損しているため断定は出来ない。天地については、この図版では仮置きにした。7は使用痕のある剥片である。8は磨石である。断面形は偏平で、磨り面は、片面が良く磨きこまれている。9は石皿である。両面ともあまり磨きこまれていない。10は石皿である。1号集石遺構から出土している。両面とも顕著に磨きこまれおり、よく使い込まれている。11は石皿である。両面とも顕著に磨きこまれている。



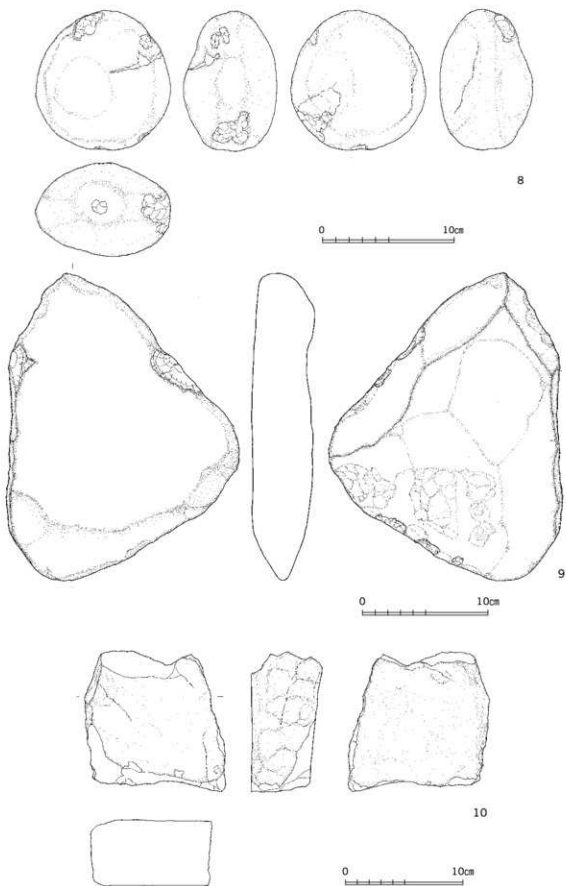
第 20 图 遗物实测图 (土器)



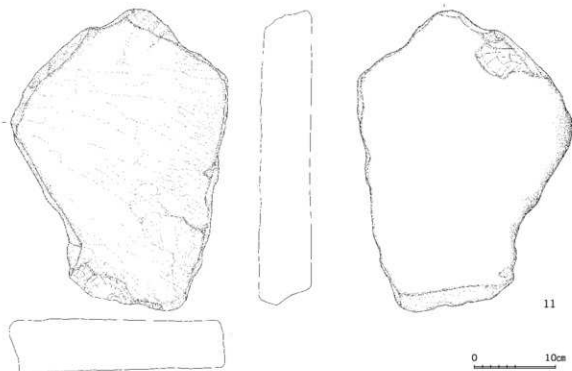
第 21 図 遺物分布図 (土器)



第 22 図 遺物実測図 (石器①)



第23図 遺物実測図(石器②)



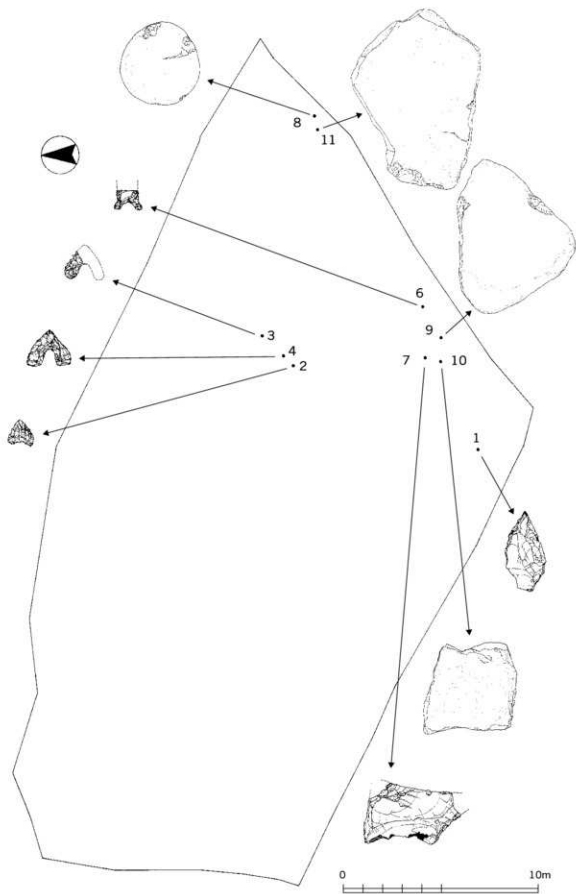
第 24 図 遺物実測図 (石器③)

第 3 表 遺物観察表

番号	種別	部位	色調	胎土	調整・文様		構成	備考
					外表面	内表面		
1	燧石	口縁	(外面)黄灰5/22.5Y (内面)黄灰 6/1.25Y		ナツ	ナツ	良	
2	燧石	口縁	(外面)に灰-褐色5/4.7.5YR (内面)に灰-褐色5/4.7.5YR	黄閃石、石英、長石	横内文	ナツ	良	燧石あり
3	燧石	胴部	(外面)に灰-褐色5/3.10YR (内面)に灰-黄褐色5/4.10YR	黄閃石、石英、安山岩	横内文	ナツ	良	
4	燧石	底部	(外面)に灰-黄褐色5/4.10YR (内面)に灰-褐色5/3.7.5YR	黄閃石、長石、石英	横内文	ナツ	良	
5	燧石	胴部	(外面)黄 6/6.5YR (内面)黄褐色 3/1.5YR	黄閃石、長石、石英	横内文	ナツ	良	
6	燧石	胴下部	(外面)黄褐色5/6.5YR (内面)黄 6/6.5YR	黄閃石、長石、石英	山形文	ナツ	良	
7	燧石	口縁近く	(外面)黄 6/6.5YR (内面)黄 6/6.5YR	黄閃石、石英、長石、安山岩、玄武岩	山形文	横方向の山形文・横線あり	良	
8	燧石	胴部	(外面)黄 6/6.5YR (内面)に灰-黄 6/4.7.5YR	黄閃石、石英、長石、雲母	山形文	ナツ	良	
9	燧石	口縁	(外面)に灰-褐色5/3.7.5YR (内面)に灰-黄 6/4.7.5YR	黄閃石、長石、石英、安山岩	格子文	格子文・施文意味による押圧痕	良	
10	燧石	口縁	(外面)に灰-黄 6/4.7.5YR (内面)に灰-黄 5/3.7.5YR	黄閃石、長石、石英	横内文	ナツ	良	
11	燧石	胴部	(外面)黄 6/6.5YR (内面)に灰-褐色5/4.7.5YR	黄閃石、石英、長石、雲母	横内文	ナツ	良	
12	燧石	胴部	(外面)黄 6/6.5YR (内面)に灰-褐色5/4.7.5YR	輝石、黄閃石、石英、長石	山形文	ナツ	良	
13	燧石	胴部	(外面)に灰-黄褐色6/4.10YR (内面)に灰-黄褐色5/3.10YR	黄閃石、石英、長石、輝石	山形文	ナツ	良	中不良
14	燧石	口縁	(外面)黄褐色4/2.10YR (内面)黄褐色5/2.10YR	黄閃石、長石、石英、輝石	山形文	山形文、ナツ、二枚裏による押圧痕	良	
15	燧石	胴部	(外面)に灰-褐色5/3.7.5YR (内面)に灰-褐色5/3.7.5YR	黄閃石、長石、石英	横内文	ナツ	良	
16	燧石	口縁	(外面)に灰-黄 6/4.7.5YR (内面)に灰-黄 6/4.7.5YR	黄閃石、輝石、石英、酸化鉄	格子文	格子文・施文意味による押圧痕	良	中不良
17	燧石	口縁	(外面)に灰-黄 7/4.7.5YR (内面)に灰-黄 7/4.7.5YR	黄閃石、長石	山形文	山形文・施文意味による押圧痕	良	
18	燧石	口縁	(外面)に灰-褐色5/4.7.5YR (内面)黄 6/6.5YR	黄閃石、長石	山形文	山形文・施文意味による押圧痕	良	
19	燧石	口縁	(外面)に灰-赤褐色5/4.5YR (内面)に灰-黄 6/4.7.5YR	黄閃石、長石、石英、雲母、安山岩	横内文	山形文・施文意味による押圧痕	良	
20	燧石	口縁	(外面)に灰-赤褐色5/4.5YR (内面)黄 6/6.5YR	黄閃石、石英、長石、安山岩、酸化鉄	山形文	山形文・施文意味による押圧痕	良	

第 4 表 石器計測表

番号	種類	石材	計測値				取り上げ番号	備考
			長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
1	ナイフ型石器	安山岩	41	20	5	3.9	№ 32	縄文早期包合層 (燧層) から出土
2	石鏃	黒曜石	12	13	3	0.5	№ 17	
3	石鏃	黒曜石	15	8	3	0.3	№ 20	
4	石鏃	黒曜石	19	15	3	0.8	№ 46	
5	石鏃	黒曜石	12	11	3	0.3	Ⅱ層一括	
6	異形石器	チャート	10	11	3	0.4	№ 2	
7	二次加工のある剥片	安山岩	27	50	10	16.8	№ 6	
8	磨石	砂岩	101	100	70	1,000	№ 38	
9	石皿	砂岩	219	197	50	3,000	№ 5	
10	石皿	砂岩	112	105	58	1,400	№ 36	1号集石遺構より出土
11	石皿	砂岩	260	369	59	9,800	№ 37	



第 25 図 遺物分布図 (石器)



## 第2節

### まとめ

今回の調査で、時期不明の溝状遺構1基と縄文早期の集石及びビット群を検出した。

阿蘇外輪山から延びる丘陵上の先端部で、さしてフラットな地形でもないこの地点において住居跡等は確認できなかった。

また、石器製作を示すチップ、フレイク等のまともな検出はなかった。このことは定住もしくは、長期にわたる滞在がこの地ではおこなわれなかったことを示す。ただ、赤変の認められる集石やいくつかの群になるビット群など、生活に結びつく痕跡は確認できた。

今回の調査で出土した押形文土器は、直口する口縁を持ち、表面横位施文で、裏面に原体条痕と横位施文の形態を持つものややや外反する口縁を持ち、表面縦位施文でやや丸みを帯びる胴部をもち、平底を呈するものに分かれる。

以上の特徴から、本遺跡出土の土器は、縄文時代早期の早水台式土器と沈目式土器に分類することが出来る。

このことは、形態の違いから2時期にわたって、この地に人々が訪れていたことを示す。阿蘇外輪山中の多くの遺跡のなかで、この丘陵上に位置した本遺跡は、縄文集落の生活様相を解き明かす材料となるであろう。

石器は、石鏃、磨石、石皿等が出土している。

この中で特殊なものとして、通称「トトロ石器」と呼ばれる資料が検出されている。同様のものが、大津町瀬田裏遺跡や中後迫遺跡、旭志村無田原遺跡でも見つかっており、これらの遺跡と阿蘇外輪山丘陵上に見られるこの遺跡を含めた、遺跡群との関連付けが今後の課題としてあげられる。

また、縄文時代早期の包含層からではあるが、ナイフ型石器1点が出土している。このことは、本遺跡の周辺に縄文時代早期以前の遺跡の存在を示すものである。

## 参考文献

- 熊本大学考古学研究室  
『桑鶴土橋遺跡』研究活動報告5 1979
- 熊本大学考古学研究室  
『塩井社遺跡』研究活動報告8 1980
- 肥後考古学会  
『肥後考古』第5号 1985
- 緒方 勉 瀬田裏遺跡調査団  
『瀬田裏遺跡調査報告』II 1992
- 木崎康弘 『無田原遺跡』 1995
- 熊本県文化財調査報告書第148集  
村崎孝宏  
『打碎遺跡・吉池さん遺跡・吉池さん北遺跡』 1997
- 熊本県文化財調査報告書第162集  
熊本大学考古学研究室  
『西原下遺跡』研究活動報告 1998
- 熊本大学考古学研究室  
『西原下遺跡』研究活動報告 2000

# 写 真 图 版



遺跡遠景

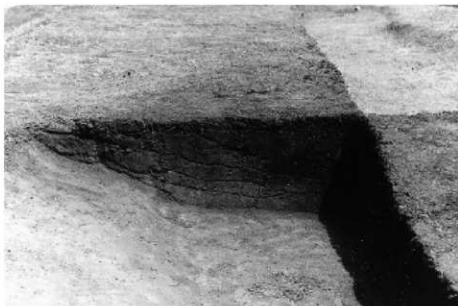


遺跡近景



調査区全景

図版 1 調査区



溝状遺構土層断面

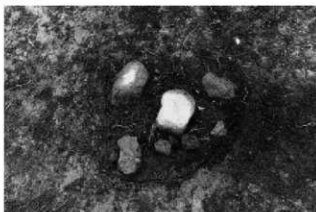


溝状遺構完掘

図版 2 溝状遺構



1号集石



2号集石



3号集石



4号集石

図版3 集石



5号集石



6号集石



7号集石



8号集石

図版 4 集石



北側ピット群

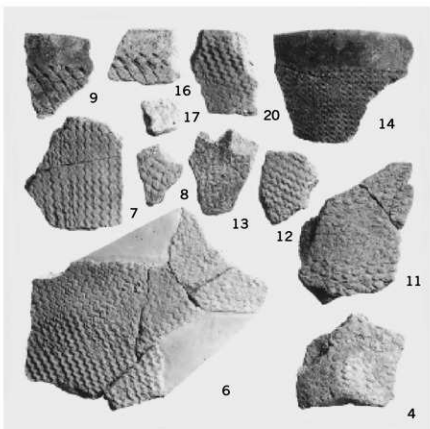
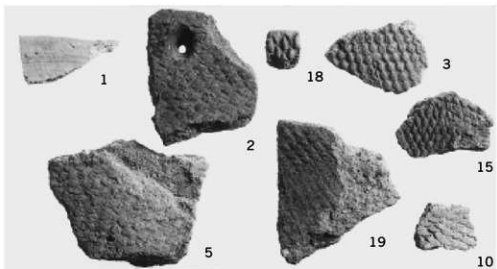


南側ピット群



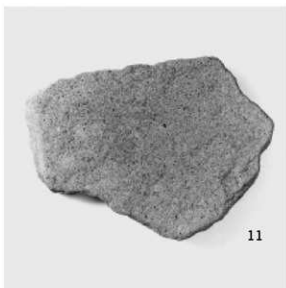
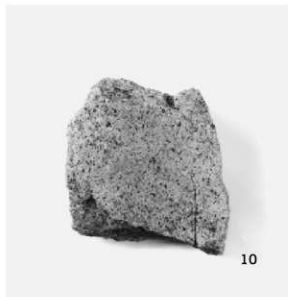
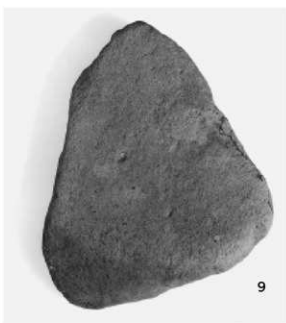
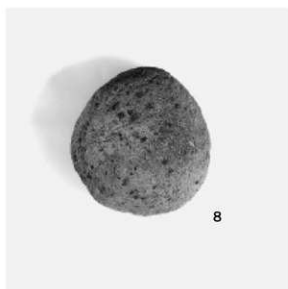
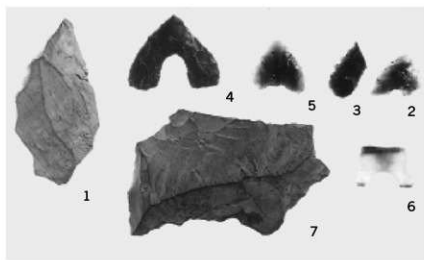
西側ピット群

図版 5 ピット群



図版6 出土遺物(土器)





図版7 出土遺物(石器)

# 堂 迫 平 遺 跡

国道 266 号線特殊改良 1 種事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

2001 . 3

熊本県教育委員会

## 例 言

- 1 本書は、平成11年度に熊本県教育委員会が、国道266号線1種改良事業に伴う埋蔵文化財「堂迫平遺跡」発掘調査の記録である。
- 2 本書に掲載した「堂迫平遺跡」は、熊本県宇土郡三角町浦宇堂迫平に所在する。
- 3 現地調査は平成11年4月より実施し、古城史雄・河野真理子が担当した。
- 4 本書で使用した地図は、建設省国土地理院発行の地形図(1:25,000)をもとに作成した。
- 5 遺構の製図は、林 ゆり、古閑満代が行った。
- 6 本書の編集は、熊本県教育委員会が行い、古城が担当した。
- 7 調査に関する記録類は、一括して熊本県教育委員会が保管している。

## 凡 例

- 1 本書に使用した地形図の一部は、熊本県宇城土木事務所から提供を受けたものを基礎にしている。
- 2 遺構の深さは、断りがないものは検出面からの深さである。
- 3 現地での遺構実測は、1/10 又は 1/100 の縮尺で行い、本書収録の際には、1/60、1/600 の縮尺となっている。

# 本文目次

例言・凡例

## 堂迫平遺跡の調査

I 調査・整理組織	1
調査の組織	
II 周辺の地理的・歴史的環境	1
(1) 地理的環境	
(2) 歴史的環境	
III 調査の成果	2
(1) 遺構検出状況	
(2) 遺構 (第3図)	
(3) 出土遺物	
(4) まとめ	
参考文献	2

# 挿図目次

第1図 堂迫平遺跡周辺遺跡分布図	3
第2図 堂迫平遺跡周辺地形図	5
第3図 堂迫平遺跡地下式土壇実測図	6

# 表目次

表1 周辺遺跡一覧表	4
------------	---

# 写真目次

第1図 上; 遺跡遠景	9
下; 地下式土壇進入口部分	9
第2図 上; 地下式土壇横穴部分	10
下; 横穴部ノミ痕跡	10

# 堂迫平遺跡の調査

- 1 所在地 宇土郡三角町郡浦字堂迫平
- 2 調査原因 国道 266 号線特殊改良 1 種事業
- 3 調査期間 平成 11 年 4 月 21 日～平成 11 年 5 月 7 日
- 4 調査主体 熊本県教育委員会
- 5 遺跡の概要 中世・地下式土壌

## I 調査・整理組織

### 調査の組織

#### 【平成 11 年度本調査】

#### 調査責任者

豊田貞二（首席教育審議員・文化課長）

#### 調査総括

島津義昭（課長補佐）

江本 直（主幹・文化財調査第 2 係長）

#### 調査担当

古城史雄（参事）

河野真理子（文化財保護主事）

#### 【平成 12 年度整理・報告書作成】

#### 整理責任者

阪井大文（文化課長）

#### 整理総括

島津義昭（課長補佐）

江本 直（主幹・文化財調査第 2 係長）

#### 報告書作成

古城史雄（参事）

林 ゆり（嘱託）

古閑満代（臨時）

#### 【調査指導及び協力者（順不同）】

熊本県土木部道路建設課

熊本県宇城土木事務所

三角町教育委員会

## II 周辺の地理的・歴史的環境

### (1) 地理的環境

宇土郡三角町は熊本県のほぼ中央部、有明海と不知火海を分断するように西に突き出た宇土半島の先端部に位置する。町の東と西に各々大岳（標高 478m）、三角岳（標高 406m）がそびえ、それらに連なる小山塊が南側では出入りの激しい海岸線を形成している。今回の調査箇所である三角町郡浦地区は宇土半島の南側に位置し、東を里浦川、西を郡浦川の谷により画された丘陵の中央部に位置する。標高は約 40m である。この同一丘陵上には、打越平地下式土壌（1984 村井・浦田）や打越矢房地下式土壌などがある。また今回の調査箇所に隣接した地点にも 1 基礎認された（第 2 図 2 号）。地元の方の話によるとその他にも多くの同様な遺構があったようである。2 号地下式土壌については、直接工事が及ばないため、調査は実施していない。

### (2) 歴史的環境

半島部には、浜の州貝塚などの縄文時代遺跡や弥生時代から古墳時代にかけての平松箱式石棺、小田良古墳に代表される、古墳時代後期の初期横穴式石室など多くの遺跡が存在する。その中で今回の調査との関連で注目されるのは製鉄遺跡の存在である。宇土半島の大岳周辺、とくに南側中腹から山麓の丘陵にかけて、19 箇所の製鉄遺跡が存在するという（1979 松本）。特に郡浦地区及び隣接する中村地区に 12 遺跡が集中する。その時期については、古代末から中世の可能性が高い。また地下式土壌も三角町郡浦の矢崎、馬場、打越、上本庄、下本庄地区に、以前は 30 箇所以上所在していたと言われている。

### Ⅲ 調査の成果

#### (1) 遺構検出状況

法面工事の掘削中に検出された。横穴(主室)の天井部の一部及び竪坑上部が削平されてしまっていた。現地表面から、竪坑上部まで、約2mの差がある。また竪坑には人頭大から80cm位までの石が多数詰まっており、入り口を塞いでいた。しかし主室である横穴には、竪坑から横穴への進入口が狭くなっているため、石は進入口で止まっており、横穴には及んでいなかった。横穴には、床面から、60cm位の高さまで、粘性の強い水分を含んだ土が堆積していた。

#### (2) 遺構(第3図)

竪坑と横穴より成る。竪坑は横穴への進入口で、平面形は一边が約60cmの不正な方形である。上部は法面工事により削平を受けている。現高から約100cm掘り下げた後に、南壁に半円形の主室への進入口が設けられている。また竪坑の中途に出入りを容易にするため、足がかりが良いようにステップが一段設けられている。

横穴の床面は、進入口より、70cmほど低くなる。床面プランは隅丸の長方形である。床面中央で、東西約228cm、南北約124cmで、床面から天井部までの高さ約150cmを測る。軟質な集塊岩(安山岩質)を掘削しており、壁面には無数のノミ等の工具痕跡が残る。

#### (3) 出土遺物

床面には小枝やワラを燃やしたような炭がわずかながら認められた。また板状の木製品が検出されたが、後世のものである可能性が高い。

#### (4) まとめ

今回の堂迫平の地下式土壇は、以前郡浦打越地区で調査された打越平地下式土壇とその構造・規模及び埋土の状況など極めて類似している。

近年県内での地下式土壇の検出例は白水村二本木前遺跡(1999 水野)などがあり、土壇中より、人

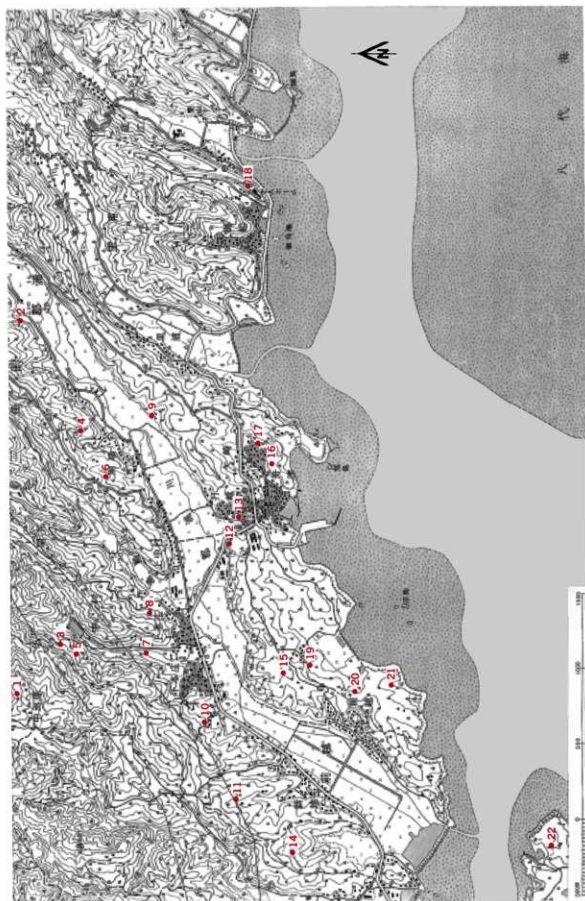
骨が検出されている。

この遺構の性格については、従来から墓・貯蔵穴・宗教儀礼等の説があり、最近では墓壇であるという説が有力であり、二本木前遺跡の例もそれを裏付ける形となっている。

ただ郡浦地区の地下式土壇は、水はけのよい丘陵部に築かれていること、かなりの数の存在が予想されることなど、宇土半島地域以外の地下式土壇と相違がある。打越平地下式土壇の調査担当者であった村井・浦田両氏も、貯蔵目的の可能性も捨てきれないとされている。筆者も明確な根拠は示せないが、郡浦地区の地下式土壇については、墓壇以外の可能性を含めて考えるべきだと思っている。またこの地域に多く存在する製鉄遺跡との関連も考慮に入れるべきであろう。

### 参考文献

- 富樫卯三郎 1982『宇城地方の地下式土壇例』
- 宇土半島 自然と文化第2集 宇土半島研究会
- 松本健郎 1979『生産遺跡基本調査報告書Ⅰ』
- 熊本県文化財調査報告第38集
- 村井真輝・浦田信智 1984『打越平地下式土壇』
- 三角町文化財調査報告第5集
- 水野哲郎 1998『二本木前遺跡』
- 熊本県文化財調査報告第167集

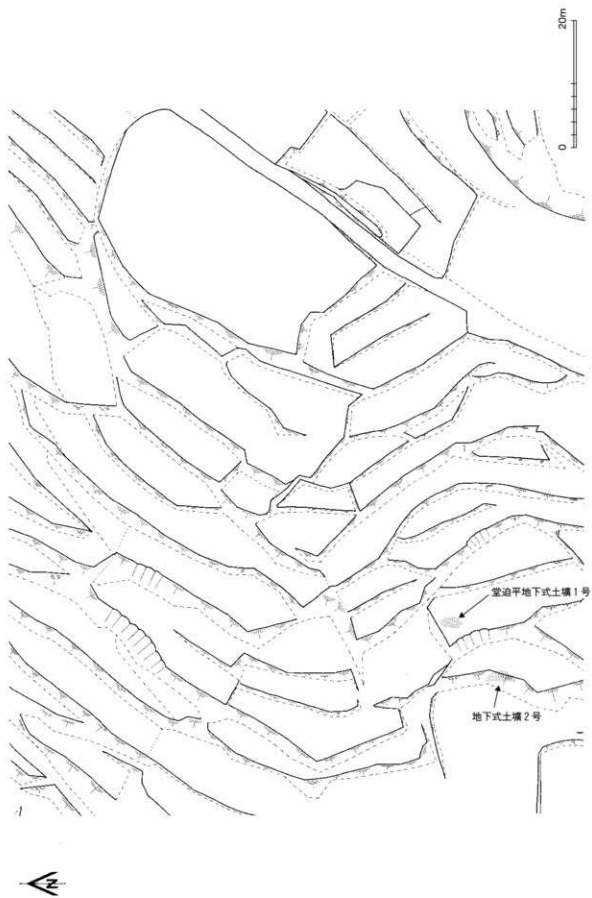


第 1 图 堂泊平遺跡周辺遺跡分布図

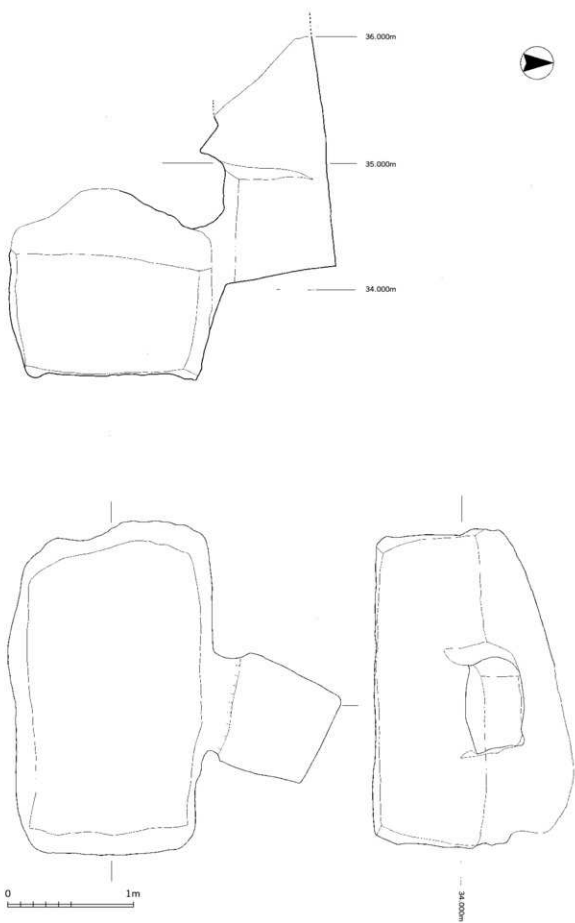
表1 周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別
1	中河原製鉄跡	三角町 大字中村 中河原	古代・中世	生産
2	城山第1号～2号横穴	〃 大字郡浦 城山	古墳	古墳
3	鬼塚古墳	〃 大字戸馳 鬼塚	古墳	古墳
4	城山製鉄跡	〃 大字郡浦 城山	古代・中世	生産
5	官迫製鉄	〃 大字中村 大平	古代・中世	生産
6	なぎさこ製鉄跡	〃 大字郡浦 宮ノ脇	古代・中世	生産
7	文蔵貝塚	〃 大字中村 文蔵	縄文・弥生	貝塚
8	上本庄古墳1号2号	〃 大字中村 文蔵	古墳	古墳
9	平野製鉄跡	〃 大字郡浦 平野	古代・中世	生産
10	本庄地下式土坑群	〃 大字中村 文蔵	中世	埋葬
11	くのご貝塚	〃 大字前越 清水	古墳・古代	貝塚
12	打越南貝塚	〃 大字郡浦 打越平		貝塚
13	堂迫平遺跡	〃 大字郡浦 堂迫平	中世	地下式土坑
14	鬼塚古墳	〃 大字前越 大鹿里	古墳	古墳
15	竹和田古墳	〃 大字前越 竹和田	古墳	古墳
16	矢崎城	〃 大字郡浦 矢崎	中世	城
17	矢崎の地下式横穴	〃 大字郡浦 矢崎	古墳	古墳
18	御船横穴群	〃 大字里浦 御船	古墳	古墳
19	西木の浦貝塚	〃 大字前越 西木の浦	縄文	貝塚
20	西木の浦古墳群	〃 大字前越 西木の浦	古墳	古墳
21	西木の浦第1号横穴	〃 大字前越 西木の浦	古墳	古墳
	西木の浦第2号横穴	〃 大字前越 西木の浦	古墳	古墳
	西木の浦第3号横穴	〃 大字前越 西木の浦	古墳	古墳
	西木の浦第4号横穴	〃 大字前越 西木の浦	古墳	古墳
22	鬼塚古墳	〃 大字戸馳 鬼塚	古墳	古墳





第2図 堂泊平遺跡周辺地形図 (1/600)



第3图 堂迫平遺跡地下式土填実測図

# 写 真 图 版



遺跡遠景



地下式土構進入口部分



地下式土壙横穴部分



横穴部ノミ痕跡

## 報告書抄録

ふりがな	おうぎのさかAいせき・どうさこびらいせき
書名	扇ノ坂A遺跡・堂迫平遺跡
副書名	主要地方道熊本高森線単軌幹線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 国道266号線特殊改良1種事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告書
シリーズ番号	第202集
編著者名	坂口圭太郎・古城史雄・河野真理子
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8609 熊本県熊本市水前寺6丁目18番1号 Ⅷ 096-383-1111 (6725)
発行年月日	西暦2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
扇ノ坂A	熊本県阿蘇郡 西原村大字 鳥子字 依山 3599番地内	43432	117	32°	130°	19990510 ～ 19990622	約697㎡	道路建設
				51°	57°			
				35°	35°			
堂迫平	熊本県宇土郡 三角町郡浦字 堂迫平	43321	087			19990421 ～ 19990507	約50㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
扇ノ坂A	散布地	先土器時代 縄文時代早期 古墳時代	集石遺構8基 柱穴群 溝状遺構1基	ナイフ形石器 押形文土器 石器 須恵器	トロトロ石器 (1点)出土
堂迫平	不明遺構	中世	地下式土墳		

## あとがき

阿蘇外輪山の舌状に伸びる尾根の先端に位置する扇ノ坂A遺跡の調査は、天候にも恵まれ1ヶ月あまりで終了することが出来た。高所より熊本平野を見下ろしながら、当時へ生きた人々の暮らしを思うにつれ、自然豊かなこの地で、貴重な遺跡の発掘に携わったことは幸せであるとの一言につきよう。

今回の調査及び整理に携わっていただいた方々のご芳名を記すことにより、感謝の意を表したい。

### 発掘作業（扇ノ坂A遺跡）

永田幸子 福永雅美 古田敏子 東 勝蔵 村上千万年 村上恵子 広瀬シズヨ  
広瀬 力 小城貴美子 東 誠二 吉本清也 塚本 静 田島弘子 村崎修三  
佐藤夕香 杉浦りえ子

### 整理作業（扇ノ坂A遺跡）

宮崎 拓（嘱託）  
齊藤大典 杉本 忍 續 仁美 牧野晶子 吉本清子 今村幸枝 木村雅子 原かおる  
山野孝子 吉岡直子 井島秀子

熊本県文化財調査報告書 第202集

扇ノ坂A遺跡

・

堂迫平遺跡

2001年3月31日

編集発行 熊本県教育委員会  
印 刷 朝 日 太陽社  
〒 862-0972  
熊本市新大江 2-5-18  
☎ 096-366-1251





この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第202集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：扇ノ坂A遺跡 堂迫平遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015年12月8日